



# オーデイション ン



慰問アイドル

春日信彦

## 神の使い

10月21日（土）、昨日まで雨続きであったが、青空が広がる秋晴れとなった。風来坊は糸島市曾根にあるオリーブ平和公園の上空を旋回し、能天気なスパイダーがやってくるのを待っていた。10時をちょっと過ぎたころスパイダーがシッポを振り振り、キョロキョロとあたりを見渡しながら公園に小走りでやってきた。公園の黄色いベンチにひよいと跳び乗り、顔を持ち上げ青空で気持ちよさそうに飛んでいる白いカラスに目をやった。ワンワンと風来坊に挨拶すると風来坊はカーカーと返事した。

ベンチの背もたれにふわりと舞い降りた風来坊は、スパイダーに挨拶した。「元気そうじゃないか。相変らず、人間にしっぽを振って、かわいがられているみたいだな」スパイダーは、嫌味な奴だと思いつつ返事した。「まあ、イヌってものは、ご主人様に仕えていれば、おいしいエサにあずかることができるからな。まあ、人間が捨てたごみを食って生きているカラスよりは、マシな暮らしができるってものだ。人間様に感謝してるよ」スパイダーは、いつも能天気だとバカにされているせいか、風来坊に嫌味を言った。

風来坊は、スパイダーはかなりアホだと思っていたが、最近は、多少は気の利いたことを言うようになったと感心していた。そこで、イヌの知恵がどの程度のものか問答してみることにした。「ほ～～、人間様に感謝ネ～～。でも、人間に使えるってことは、気苦労が多いだろう。その点、カラスは、人間にアドバイスして感謝されているんだ。神の使いのカラスがいなければ、おそらく、目先のことしかわからない人間はとっくの昔に滅びていたんじゃないかな。イヌは人間からエサをもらっているわけだから、カラスはイヌも救ってやっていることになる。そう考えると、イヌにも感謝されていいということだな」

スパイダーは、カラスに予知能力があるからと言って、カラスは神の使いなどと言ってドヤ顔をしている風来坊を見ていると頭をガブリと食いちぎりたくなった。だが、ちょっと大人になったスパイダーはグッと気持ちを抑えて、もう少し風来坊の自慢話を聞いてやることにした。上から目線の風来坊にムカついていたスパイダーではあったが、気持ちを落ち着かせて謙虚な気持ちで尋ねた。「人間にアドバイスできるそうだが、どんなことをアドバイスするんだい」

ドヤ顔の風来坊は、胸を張って自慢話を始めた。「まあ、イヌの頭ではわからんと思うが、まあ、聞くがいい。そう、ほら、イヌでもビビッてしまう地震なんかそうだ。カラスは、地震が来るのを予知できる。だから、カラスたちは、カーカーと言って鈍感な人間どもに教えてあげるんだ。敏感な動物は、知らせを聞いてすぐに非難するが、おバカと言うか、聞く耳を持たないというか、高慢ちきな人間は、カラスの知らせを無視するものだから、大騒ぎをするばかりで、逃げ遅れて死んじまう」

スパイダーは、風来坊こそバカだと思った。「風来坊、君の方こそバカじゃないのか。人間は、カラス語などわかるはずがない。人間は、イヌ語もネコ語もわからないんだ。人間は、知能が高いようで、かなりバカなんだ。困ったものさ」風来坊もそのことはわかっていたが、さらに、話を続けた。「人間が、おバカなのは重々承知さ。放射能汚染もカーカーと言って教えてあげたんだが、まったく聞く耳を持たない。人間は、立派な脳を持ってはいるんだが、使い方を知らんと言うべきなのか、命を救うことに使わず、真逆の殺人に使っておる。まったく、正気の沙汰じゃない」

スパイダーもその点に関しては、同感だった。「まったく、困ったものだ。人間は、殺人を娯楽の一つとしている。同じ動物として、恥ずかしいったらありやしない。風来坊、人間を教育してくれないか。イヌやネコには、手に負えん。人間同士の殺し合いならまだいいが、人間にご奉公しているイヌやネコまでも殺すんだよ。地球を救えるのは、カラスさんたちしかいないように思う。頼むから、人間をどうにかしてくれ。このままじゃ、地球上の生物は、すべて滅びてしまう」

しかめっ面になった風来坊は、しばらく考え込んでいた。原爆実験、原発事故による放射能汚染、HIVの蔓延（まんえん）、これらのことを考えるとお先真っ暗になってしまった。「そういわれてもな～～。カラスにできることは、アドバイスすることだけなんだ。欧米人たちは、アフリカ人やアジア人が増え続ければ、自分たちが滅ぼされると思っているらしく、放射能やHIVを使って彼らの人口を減らそうとしているんだ。まあ、欧米人の被害妄想もわからなくもないが、人間以外の動物にとっても、いい迷惑さ。我々までも、殺されてしまう。何かいい方法はないか、考えてはいるんだが」

悲壮な顔つきになったスパイダーがうなだれていると白いピースと黒い卑弥呼女王がゆっくりと歩きながらベンチに近づいてきた。風来坊がカーと言って声をかけるとスパイダーはヒョイと頭を持ち上げ、振り向いた。彼女たちがベンチ横までやってくるとニコッと笑顔を作ったスパイダーは、ピョンと跳び降り席を譲った。「どうぞ、どうぞ、お座りください」ピースは卑弥呼女王に声をかけた。「ヒミコ様、お先にどうぞ」卑弥呼女王がヒョイと跳び上がりベンチに腰かけた。次に、ピースもヒョイと跳び上がり卑弥呼女王の隣に腰かけた。

ピースは久しぶりに会った風来坊に尋ねた。「いったい、どこに行ってたの？里帰りでもしてたのかしら？」ニコツと笑顔を作った風来坊は、甲高い声で答えた。「里帰りってわけじゃないんだけど、ちょっと仲間から情報を手に入れるために、江戸に帰っていたんだ。我々、カラスエージェントは結構忙しいんだ。動物たちを守るために日夜頑張っているからな。カラスは神の使いだから、当然のことをやってるだけなんだけどね」

目を丸くして驚きの表情を見せたピースは、感謝のお世辞を言った。「あら、そうでしたの。カラスは賢いとは思っていましたが、風来坊さんって、神の使いだったのですか。まことにご苦労様です。そこで、神の使いのカラスさんたちをお願いなんだけど、最近、地震、津波、台風、大雨、などの天災が多いじゃない、これって、どうにかならないのかしら。神の使いだったら、神通力とやらで、未然に防げるんじゃない。人間は、頼りにならないのよね～～」

風来坊は、なんと無茶を言う猫かとあきれてしまった。風来坊は、顔をブルブルと激しく振り、答えた。「ピースさん、無茶を言ってはいかん。我々、神の使いは、天災を予知することはできても、天災を防ぐことはできん。しかも、最近の天災は、かなり厄介なんだ。最近、予知が難しい天災が起きているんだ。もしかすると、天災じゃなくて人工的な災害かもしれないんだ。そこで、エージェント仲間と今後の活動について話し合っているところなんだ」

ピースは、予知が難しい天災があるのだったら、やっぱ、神の使いじゃないと思えてしまった。「あら、風来坊さん、本当は予知できないんじゃないの。神の使いだったら、どんな災害でも、完璧に予知できるはずじゃない」風来坊は、予知を疑われて頭に血が上ってしまった。顔を真っ赤にした風来坊は、血走った眼で返事した。「何をおっしゃる。我々は、今までに数多くの天災を予知し、動物たちの命を救ってきたんだ。まあ、我々は、動物たちに感謝されなくとも、神はちゃんと見ていてくれるからいいんだけどさ」

じっと耳をそば立て話に聞き入っていた卑弥呼女王が話し始めた。「そう、御謙遜なされなくともいいですよ。私は、カラスさんたちの働きをちゃんと知っています。確かに、多くの動物たちは、カラスさんたちの予知のおかげで助かっています。これからも、動物たちを助けてあげてください。ところで、一昨年、熊本で地震が起きましたが、あの地震は、予知できましたか？」

風来坊は、眉間に皺をよせ腕組みをすると大きくうなずき返事した。「東日本の地震も熊本の地震も予知できたのだが、どうも、今までの地震と違うんだ。我々は、地震を予知して、仲間が動物たちに知らせるのだが、最近の地震は、いつもより早くS波がやってくるんだ。だから、かなりの動物たちが逃げ遅れて死んでしまった。だから、今後の救済対策を考えているところなんだ」

スパイダーはここぞとばかり風来坊に食って掛かった。「神の使いだったら、もっとしっかりやってくれよな。僕たちには、予知能力なんてものはないんだから」風来坊は、面目ないという表情で謝った。「おっしゃる通り。まったくもって、不甲斐ない。我々は、最高の予知能力を持っていると自負していたんだが、この機会に予知能力の向上を図るために、各国に予知能力研究委員会を作り、毎年一回、全国予知能力会議を開くことにした。最近の奇妙な災害に対する明確な予知が必ずあるはずなんだ。必ず、発見してみせるから、いましばらく待ってくれ」

ピースは、今までにない奇妙な天災が続いていることに疑問を抱いていた。風来坊の話聞いて、やはり、これらは天災ではなく、人工災害ではないかとピンときた。「最近の災害は、どうも腑に落ちないよ。アメリカにもエージェント仲間がいるんでしょ。彼らは、なにかつかんでないの？」風来坊は、しばらく黙っていたが、ヒューストンエージェントの仲間から聞いた情報を話すことにした。

「ピースさんも、不審に思っておられましたか。まだ、はっきりとしたことはわからないのですが、ヒューストンエージェントの仲間からの情報では、北アメリカ、南アメリカ、などに起きた災害の予知に共通するものがあり、いつもの天災の時の予知とは違うとのことなんだ。もしかすると、最近の災害は、気象兵器によるものではないか？と彼らは言うんだ。とにかく、一刻も早く、奇妙な災害に対する予知能力を研究し、動物だけでなく人間も救わなければならん」

卑弥呼女王は、目を閉じてじっと風来坊の話に聞き入っていた。目を開くと心静かに透き通った声で話し始めた。「天災の予知のことは、カラスさんたちにお任せしましょう。私たちネコは、戦争を好む下品な人間の心を少しでも上品にする役目に専念いたしましょう。ピースさん、カラスさんたちに負けないように私たちも頑張らなくてはなりません。イヌさんたちは、被災して悲しんでいる人たちを励ましてあげてください。動物たちが力を合わせれば、きっと人間を上品な動物にできるはずです。人間を卑下（ひげ）するのではなく、少しでも向上させるのが、我々動物の役目だと思います」

マジな顔つきで目を輝かせて聞き入っていたピースは、ヒョイと立ち上がって拍手した。「さすが、ヒミコ様。地球を守るのは、我々動物です。一致団結して、人間たちをしっかりと教育してまいりましょう。そうだ、カラスさんたちは、予知能力研究委員会を作られるのだったら、ネコたちは、品位向上委員会を作りましょう。イヌさんたちは、被災者たちを励ます激励支援委員会を作るといいんじゃない」

ピースの話に賛同したスパイダーもヒョイと立ち上がり拍手した。「地球は、みんなで守ろう。人間の好き勝手にさせていたら、自然環境は破壊され、すべての動物は死滅してしまう。動物たちは、それぞれの委員会を作って、地球環境向上に努めればいいんだ。カラスさん、世界中の動物たちにこのことを広報してくれ。頼むよ」風来坊は、大きくなずき、ドヤ顔で返事した。「世界中にいるシーアイエーのエージェント仲間に早速指示を出そう。動物たちは地球環境保護委員会を作るようにと。今日の会議は、実に有意義だった。スパイダーも最近、賢いことを言うようになったじゃないか。見直した」



照れ隠しに頭を書いたスパイダーは、聞きなれないCIAについて質問した。「風来坊さん、さっきのシーアイエーってのは、いったい何なんだい？」風来坊は、略語の説明をした。「シーアイエーと言うのは、Crows Intelligence Agencyの略さ。我々は、特に予知能力が高いカラスたちを世界中から集めてカラス情報局を作っているんだ。彼らは、人間の知能をはるかに超越した予知能力と感性を持っているんだ。情報に関することは我々CIAに任せてくれ。君たちは、人間を教育してほしい」

卑弥呼女王は、目を開くと第3次世界大戦のことについて話し始めた。「風来坊さんの諜報活動は、動物たちの生命維持と団結に、なくてはならないものです。でも、一方で人間は戦争と言う殺戮（さつりく）活動を今も続けています。人間は、共存の大切さがまったく分からないのでしょう。本来、人間は我々と違い欲がとても強い動物なのでしょう。そのうえ、お金を発明した人間は、お金の奪い合いに明け暮れるようになってしまいました。欲をコントロールできなければ、今後も戦争と言う殺戮活動を続けることになります。

もはや、戦争の拡大を人間の力では食い止めることができなくなっています。かといって、果たしてネコやイヌに人間を教育できるかどうか、不安です」野蛮な人間の姿を想像するとピースも心細くなってしまったが、勇気を出して叫んだ。「ヒミコ様、弱気は禁物です。人間に最も信頼されているのは、ネコじゃありませんか。ネコが全力で教育すれば、きっと人間も変わるはずですよ。やるしかないのです、ヒミコ様」

ピースに賛同したスパイダーも大声で叫んだ。「オレはやるぞ～～。人間になんかに地球を破壊されてたまるものか。きっと守ってやる。ピースさん、一緒に頑張ろ～～」悲しげな表情をしていた卑弥呼女王だったが、ピースとスパイダーの元気な声で勇気が湧いてきた。「そうね、私たちが諦めてしまえば、地球は終わりよね。弱音を吐いている場合じゃないわね。一致団結して、頑張りましょう」

突然、風来坊が、カ～～と明るい声を発した。「ヨ～、ポンタじゃないか。元気かい。今、人間の悪口を言っていたところなんだ」公園の裏山に住んでいるタヌキのポンタが、話声を聞きつけてやってきた。「いい気持で寝ていたのに、スパイダーの大声で目が覚めちゃったよ。いったい、何事だい」スパイダーが即座に返事した。「欲が突っ張った戦争好きの人間に、いつまでも好き勝手な真似をさせていたら、地球はダメになってしまうって言っていたんだ。ポンタもそう思うだろ」

首をかしげたポンタは、おびえた顔つきになって答えた。「いや、まあ、なんといえればいいか、俺らタヌキは、アホだから、難しいことはわかんない。最近、仲間が猛スピードで突っ走る黒いバケモノに踏み殺されているんだ。まったく、俺たちって、つくづく、アホだと思うよ。逃げ足が遅いと言うか、鈍感と言うか、知能が低いというか、あきれられるよな。君たちは、動物の中のエリートだから、人間のことは、君たちに任せるよ。もっと、住みよい地球にしてくれ。たのむ」

スパイダーは、タヌキがひかれているのを最近よく見かけていた。「ポンタ君、黒いバケモノと言うのは、人間が作った車と言う奴さ。足の速いイヌだって、逃げ遅れて、ひかれることがある。人間と言うのは、何をしでかすかわかったものじゃない。黒いバケモノを見たら決して近づかないようにと仲間に周知徹底した方がいい。そう、最近の人間は、ウシやブタだけじゃなく、カラスやイヌまでも殺して食うんだ。まったく、人間は、命を何とってるんだ」

卑弥呼女王が地球上の動物たちに向かって諭すようにゆっくりと話し始めた。「みなさん、人間を我々動物と同じように考えてはなりません。確かに、人間は、動物の中で最も知能が高く、また高度な言語力と創造力を持っています。でも、その反面、命を尊重する気持ちが薄いのです。人間は、動物を娯楽のために殺傷し、金儲けのために同類の人間をも殺すのです。もはや、正常な動物とは言えません。これからは、カラスの予知能力とイヌとネコの教育力で、不完全な人間を変えていかなければなりません。私たちが今立ち上がらなければ、人間、動物たち、いや、地球上すべての生物が、死滅してしまいます。私は、地球誕生以来の女王です。命を懸けて人間を教育してまいります」

卑弥呼女王のスピーチに感動したピースは、2メートルほどジャンプして、両手両足で拍手した。「さすが、卑弥呼女王様、なんとありがたきお言葉。私たちも、卑弥呼女王についてまいります。ピースは、命をかけて、地球のために頑張ります」スパイダーは、地球誕生以来の女王と言うのは、大げさだと思った。猫の女王と言うのは認めても、それは、動物誕生以来の猫の女王と言うべきじゃないかと思った。

あきれた顔でスパイダーは、ネコを褒めた。「まあ、ネコはかわいいし、美しいし、上品だから、人間に行儀作法をしっかりと教えてくれ。そうそう、話は変わるけど、明日、タクミちゃんが、伊都国アイドル発掘オーディションに出るって駄々（だだ）をこねてるんだって。それはいいんだけど、どうしても諦めなかったら、伊都文化会館まで、タクミちゃんを背中に乗せて行ってってくれってアキちゃんというんだ。まったく、かわいい子供でも、無茶なことを言うもんだよ。イヌはウマじゃないんだ。いったい、イヌを何と違ってんだ」

ピースが笑いながらからかった。「なに、言ってんのよ。いつもアキちゃんにエサをもらってるんでしょ。こんな時こそ、恩返し、しなくっちゃ。頑張りなさい。タクミちゃんがオーディションに合格したら、ステーキを御馳走してくれるかもよ」ふくれっ面のスパイダーは言い返した。「バカなことを言うんじゃないよ。イヌのことだと思って。僕は、セントバーナードじゃないんだ。タクミちゃんが乗ったら、背骨が折れちゃうよ。あ～～、ついに、僕は人間に殺される。そんな冷たいこと言わず、ピース、助けてくれ」風来坊、卑弥呼女王、ポンタ、ピースたちは、ハハハと大声で笑った。

## オーディション

10月22日（日）、亜紀は、アンナに嘘をついて家を出ることにした。「ママ、ちょっとタクミと公園に行ってくる」亜紀は、拓実にガンダムの帽子をかぶらせ、ブルーのスニーカーを履かせると右手を取って表の道路に出た。オーディションの第一次審査は午後1時からの開始と言うことで、予定通り午前10時に家を出発した。家から伊都文化会館までは、約6キロあるから、3歳の拓実の足で1キロ約20分かかったとして、約2時間はかかると考えた。当然、拓実のことだから、約200メートルも歩けば、疲れたと言って歩くのをやめると予想した。そこで、オーディションをあきらめるように、亜紀は拓実を説得するつもりでいた。

政府は、国防軍慰問アイドルユニットプロジェクトを推進していた。具体策として、国防省の支援を受けた芸能プロダクションが、ユニットメンバーを集めるために全国各地でアイドル発掘オーディションを開催していた。そのことから、へき地の糸島市でも伊都国アイドル発掘オーディションが開催されることになった。そのオーディションを知った隣の明菜ちゃんは、早速応募した。

拓実がオーディションに出るきっかけとなったのは、2ヶ月前の夕食での亜紀の話からであった。伊都国アイドル発掘オーディションに隣の明菜ちゃんが応募したとアンナに話したところ、その話を聞いていた拓実も出たいと言いだしたのだった。アンナは、拓実がオーディションの意味が分かっていないと思い無視したが、拓実はしきりに亜紀に出たいとせがんだのだった。年齢欄に3歳と記入していれば、おそらくいたずら応募と思われ無視されるに違いないと思った亜紀は、拓実を納得させるために、歌う題名を“桃色吐息”と記入し、しぶしぶメールで応募した。ところが、なぜか、第一次審査のエントリーナンバーが送られてきた。

第一次審査のエントリーナンバーが送られてきたことをアンナに話したところ、それは何かの間違い、と鼻で笑われ、すぐに断りの電話を入れるように言われた。亜紀もおそらく何かの間違いだと思い、断りの電話を入れようと思ったが、拓実はずっと黙って（だだ）をこねた。困り果てた亜紀は、歩いて約2時間かかる会場まで、歩いて行くのなら連れて行くと言ったところ、脅しの意味が分からなかったのか、意に反して拓実は歩いて行くと言い張った。拓実はまだ3歳だから、2時間も歩くことはできないと、何度も言い聞かせたが、それでも、行くと言い張って、泣きわめいた。

困り果てた亜紀は、当日、とにかく拓実を会場に連れて行って、アンナに断ってもらおうと考えた。そのことをアンナに言ったところ、「ママに恥をかかせるつもり」と一蹴され、亜紀は途方に暮れてしまった。思い切って断りの電話を入れようと何度も思ったが、拓実の泣き叫ぶ顔を思い出すとどうしてもできなかった。拓実にあきらめさせるには、実際に当日歩かせて、足が痛くなって歩けなくなったときに、あきらめるように説得する以外にないと思った。

オーディションの審査員たちから、拓実が女子に見られるようにピンク色のキュロットスカートを穿かせた。亜紀は、女装した拓実の右手を引いて歩きながら、神様お願いします、どうか拓実が諦めますように、と心でつぶやいていた。スパイダーはいつものように二人の前をキョロキョロとあたりを見渡しながらかちこちチョコチョコと走り回っていた。二人は南北に走る公園西側の通りから東西に走る大きな通りに出ると左に曲がり西に向かって歩道を歩いた。

左折してから200メートルほど歩くと、拓実が立ち止まった。亜紀は“やった”と心で叫んだ。そして、もう帰ると拓実が叫ぶと思った。拓実が腰を落として叫んだ。「おねえちゃん、おんぶ、おんぶ」亜紀は目を吊り上げた。あの時は、歩くと約束したのに。何がおんぶよ。絶対におんぶなんかしてやるものかと思った。亜紀は大声で拓実を叱った。「何がおんぶよ。歩くって言ったじゃない。歩くのが嫌なら、諦めなさい。もう帰ろう。さあ立って」

亜紀は、拓実の右手をグイッと引っ張ったが、頑として立ち上がろうとしなかった。拓実は、駄々をこねた。「いやだ。おんぶ。絶対、行く。おんぶ、おんぶ」亜紀は心で叫んだ。“この裏切り者、絶対おんぶなんかしてやるものか。”目を吊り上げた亜紀は、何度もたくみの右手を引っ張ったが、それでも、立ち上がろうとしなかった。ついには、ワア~~~~ン、ワア~~~~ン、と泣き叫び始めた。「おねえちゃんのイジワル。おんぶ、おんぶ」亜紀は、まさかこんな展開になるとは思ってもいなかった。通りすがりの人が見たらいじめていると思われるようで亜紀まで泣きたくなくなってしまった。

拓実はいったん泣き始めるととことんなく癪があった。しゃくけど、ちょっとだけおんぶして、あきらめさせることにした。「分かったから、泣くのは、やめて。ちょっとだけだからね。分かった」亜紀が拓実の前で腰を下ろすと拓実ジャンプして背中に飛び乗った。「やったー、レッツゴー。走れー、走れー」亜紀は超ムカついた。何が走れよ、心の底から怒りが爆発すると焔に放り投げてやろうかと一瞬思った。

おんぶして50メートルほど歩くと足首が痛くなってきた。もうここまでしてあげたから、拓実も諦めてくれるだろうと立ち止まり、かがみこみ拓実に訴えた。「もうダメ、おねえちゃん、死にそう」亜紀は、あ～～、と叫び前に倒れた。それでも拓実は、背中から降りようとしなかった。「もう疲れたの。ちょっと歩いただけじゃない。早く起きて。さあ」亜紀もこの言葉には、切れてしまった。亜紀は、グイッと起き上がり、拓実を睨み付けた。

「何、言ってるのよ。あの時、歩くって言ったのは、誰よ。歩くのが嫌なら、諦めなさい。もう、おねえちゃん、帰るから。行きたければ、一人で行けばいいのよ」一瞬しかめっ面になった拓実は、ワア～～～ン、ワア～～～ン、と宇宙の果てまで届くような大声で泣き始めた。その泣き声を聞いてびっくりしたのか、畑で作業していた腰の曲がったおばあちゃんが、杖をつきながらヨッコラショ、ヨッコラショ、と二人のところにやってきた。

「どうしたとね。お腹でも、いたかとね」亜紀は、なんと言って説明したらいいか戸惑ってしまった。拓実は、一向に泣き止まなかった。亜紀は、とっさに叫んだ。「タクミは、歩きたくないだけなんです。歩くと約束したのに。悪いのは、タクミです」おばあちゃんも困った顔をして拓実に声をかけた。「疲れたっちゃろ。少し休んで、歩けばいいたい。どこまで、歩くとね」おばあちゃんは、亜紀に尋ねた。亜紀は即座に返事した。「伊都文化会館まで」おばあちゃんは、身を引いて驚いた。「あらま、あんなどこまで。そりゃ、無理バイ。大人でも、無理バイ。やめときんしゃい」



当初から無理なことはわかっていたが、おばあちゃんに事情を説明する気にはなれなかった。亜紀は、拓実の声かけた。「ほら、おばあちゃんも無理って、さあ、帰ろう」亜紀は、拓実の右手を引っ張った。拓実は、頑として立ち上がろうとしなかった。「いやだ。いやだ。行く。行って、歌う」亜紀が途方に暮れていると、聞いたことのある男子の声が聞こえてきた。「オ～イ、アキちゃ～～ん」小太りのヒフミンが手を振りながら駆け寄ってきた。

ハ～、ハ～と息を切らしながら駆け寄ってきたヒフミンは、亜紀に声をかけた。「公園まで、泣き声が聞こえたバイ。なんしょつと？」亜紀は、助っ人がやってきたと思い笑顔で答えた。「タクミが歩きたくないって、泣くのよ。手を引っ張っても、おんぶ、おんぶ、って、動かないんだから。ヒフミン、何とか言って」大柄なヒフミンは、ここから家までだったら、近いからおんぶして帰ってあげようと思った。

「タクミ、おんぶしてやるバイ」ヒフミンは、拓実の前で腰を下ろした。それを見た拓実は、突然笑顔になって、勢いよく背中に飛び乗った。ヒフミンが腰を上げると「ヤッター、レッツゴー。おうまのおやこは なかよしこよし いつでも いっしょに ぽっくり ぽっくりあるく」拓実は、上機嫌でおうまの歌を歌い始めた。ヒフミンが、踝を返し歩き始めると、拓実が叫んだ。「こっちじゃない。あっち」拓実は、北に向かって指さしていた。

ヒフミンは、亜紀の顔を覗き見た。「あっちって？」亜紀は、ヒフミンをだましたようで気まづくなくなってしまった。「あのね、家に帰る途中じゃなくて、会場に行く途中だったの」ヒフミンは、即座に尋ねた。「会場って、どこ？」ちよっとうつむいてしまった亜紀は、小さな声で返事した。「伊都文化会館」ヒフミンは、確かに伊都文化会館と聞き取ったが、聞き返した。「伊都文化会館なの？」亜紀は、ごめんなさいと言うような顔で返事した。「そう、伊都文化会館」

ヒフミンは、伊都文化会館まで何度も走って行ったことがあった。だから、近道も知っていたが、子供をおんぶしていけるかどうか自信がなかった。「伊都文化会館までか。走れば20分ぐらいで行けるんだけど、おんぶだと・・・」ヒフミンは、少し考え込んでしまった。即座に、亜紀は弁解した。「違うの。伊都文化会館までなんか、歩けっこないから、タクミを連れて帰るところだったの。ヒフミン、さあ、帰ろ」

突然、拓実が叫んだ。「いやだ。行く。オーディションに行く。絶対行く」オーディションと聞いたヒフミンは、亜紀に尋ねた。「オーディションって？」亜紀は、強引に引き返そうかと思ったが、拓実が泣き叫ぶようで事情を説明することにした。「伊都国アイドル誕生オーディション一次審査で、歌うことになったの。これって、なにかの間違いだと思うんだけど。タクミは、出る、出る、って言い張るから、歩かせて、オーディションを諦めさせようとしたのよ。でも、泣き叫んで、帰ろうとしないの」

ヒフミンは、北側にある高速道路のはるか向こうをじっと眺めていた。オーディションに出ることになっているのならば、必ず出るべきだと思った。約束をすっぽかすことは、悪いことだと思った。「タクミはオーディションに出ることになっているんだろ。だったら、出るべきだよ。約束を破ることはよくないよ。始まるのは、何時から？」亜紀は、やはりアンナに言われたときに、思い切って電話で断るべきだったと反省したが、いまさら、当日の今になって断りの電話を入れる気持ちになれなかった。

「午後1時から。でも、行かなかったら、欠席でいいんじゃない？」ヒフミンは、約束を破るのは、最も悪いことだとおじいちゃんに言い聞かされていた。「ダメだよ。約束は、必ず守らなくっちゃ。よし、まだ時間はある。タクミぐらい、へっちゃらだ。タクミ、ヒフミンにまかしとき」ヒフミンは、西に向かって歩道を歩き始めた。あっけにとられた亜紀は、すぐに後を追いかけた。「ヒフミン、本当に、伊都文化会館までおんぶしてくれるの？」

ヒフミンは、大きな声で即座に返事した。「大丈夫。時間はかかるけど、伊都文化会館までぐらいだったら、へのカッパたい」亜紀は、どうしようもないバカだと思っていたが、この時だけは、ヒフミンが、たくましく思えた。“ヒフミン、ありがとう”と心でつぶやいた。「よかったね、タクミ。ヒフミンって、力持ちね。アキは、おんぶして、死ぬかと思った」ヒフミンは、小さいときから野良仕事をやっていて足腰が強かった。また、小学6年生では、体格が大きい方だった。勉強はからっきしダメだったが、走るのは得意で、校内マラソンでは、いつも1番か、2番だった。

ホッとした亜紀は、ヒフミンのあとに続き歩き始めた。でも、本当に何かの間違いで、拓実がオーディションに出られないことがわかったら、拓実は泣き叫ぶんじゃないかと思った。ヒフミンもがっかりすると思ったが、もういまさら引き返すことはできないように思った。こうなったら、どうにでもなれと開き直った。「ヒフミン、足痛くない。疲れたら、休んでね。時間は、いっぱい、いっぱい、あるから」

ヒフミンにとって、5キロぐらい歩くのは、まったく平気だったが、3歳の子供がオーディションに出られることに疑問を感じていた。「アキちゃん、タクミは、どんな歌を歌うんだ。どんぐりコロコロか？」ヒフミンの知らない歌だと思ったが、即座に返事した。「童謡じゃないの。紅白歌合戦にも出場したことのある高橋真梨子の桃色吐息（ももいろといき）。ヒフミンは、聞いたことないでしょ」AKB48の歌は、聞いたことはあだが、高橋真梨子も桃色吐息も初めて聞いた。

「へ～～、ももいろ、何とかか。タクミも、変わった子供だな～。本当に歌えるのか？俺は、恋チュン、なら歌えるけどな～」亜紀は、内心気が気ではなかった。もし歌うことになって、本当に歌えるのだろうか心配になった。桃色吐息は、拓実がカラオケでよく歌っていたから、思い付きで書いてしまったが、審査員の前でも歌えるのかと不安になった。その不安以上に、歌も聞いてくれず、即座に追い返されたら、それこそ拓実が泣き叫ぶようで、そのことを思うと、足がすくんできた。

ヒフミンは、少し遠回りになっても歩道のある道路を選んで歩いた。時々休憩はしたが、12時間15分に伊都文化会館に到着した。受付時間は、12時20分からだったが、間違いであれば、少しでも早めに分かった方がいいと思い、即座に、亜紀は、館内にかけて行った。受付テーブルには、係員はいなかったが、テーブルの横には少女たちの列ができていた。テーブルの横でスタッフらしきお兄ちゃんとお姉ちゃんが立ち話をしていたので声をかけた。「オーディションに来ました。セキタクミですが、間違いありませんか？」イケメンのスタッフは、腕時計をチラッと見て、まだ3分ほど早かったが、頷いて、返事した。「ちょっと早いけど、もう始めるか。順番に、受付するから、列にならんで」

受付テーブルの椅子に腰かけたスタッフは、列を作っていた応募者からはがき受け取るとエントリーナンバーと応募者名を読み上げ始めた。受付は名簿にチェックを入れるだけでスピーディーに行われた。亜紀の番がやってくると震える手でエントリーナンバーが記載されたはがきを差し出した。スタッフはテーブルに置かれた名簿を見つめ応募者名を確認した。「セキタクミちゃんね、エントリーナンバー19。向こうに、控室があるから、あそこで待っていて。スタッフが、審査の説明に行くから、いい」

亜紀は、エントリーが間違いでなかったことにホッとしたが、どうして3歳なのにエントリーできたのか不思議だった。「ちょっと、いいですか？」スタッフは、笑顔で返事した。「はい、なんでしょう」亜紀は、小さな声で尋ねた。「タクミは、3歳なんですけど、それでも、いいんですか？」スタッフは、ちょっとひきつった顔で、返事した。「え、3歳？13歳じゃないの？名簿には、13歳と記載してあるよ。歌は、高橋真梨子の桃色吐息。本当に、3歳なの？」亜紀は、やっぱりと思った。3歳でオーディションに出られるはずがないと思っていた。でも、いまさら、拓実に出られないとは言えなかった。会場まで連れてきて、歌えないと言え、大声で泣き叫ぶと思った。

スタッフも困った顔つきになっていた。スタッフの顔色が青く変わっていた。「マジ、3歳。ちょっと待ってね」スタッフは、駆け足で奥のスタッフの控室に飛び込んでいった。しばらくするとスタッフが、笑顔で戻ってきた。「年齢は、15歳までとしか書いてなかったから、3歳でも、OKだとき。よかったね。審査員は、目を丸くして、びっくりしてたよ。3歳の桃色吐息をぜひ聞いてみたいとき。頑張ってる」

亜紀は、OKと聞いてジャンプして甲高い声をあげた。「ヤッター、ありがとう、お兄ちゃん。タクミ、きっと喜ぶ。ありがとう」亜紀は、会館前の広場で待っているヒフミンと拓実はそのことを伝えようと全速力でかけて行った。「タクミ、受付、OKよ。さあ、控室に行こう」間違いじゃなかったと分かったヒフミンは笑顔で拓実の肩をポンと叩いた。「よかったね。タクミ、ガンバ」ヒフミンは、オーディションが終わるまで、広場で待つことにした。

亜紀は、拓実の右手を引いて、控室に向かった。控室には、すでにたくさんの中学生と小学生が椅子に腰かけていた。彼らは、妹を連れてオーディションにやってきたと思っているに違いないと思い、目立たないように後ろの方の席に腰かけた。亜紀は、拓実を膝の上に載せ、しっかりと抱きしめていた。歌が、かぶっていないか心配になったのか、隣の中学生と思われる女子が亜紀に声をかけてきた。「何歌うの？」ちょっとためらったが、亜紀は、引きつった顔で返事した。「桃色吐息です」

その女子は、ホッとした顔で返事した。「私は、赤いスイートピー。アイドルと言っても、マスクはほどほどでいいんだって。整形って手があるから。頑張ろうね」亜紀は、ブスと言われたようでとムカついたが、“そういうあんたも特にかわいくないじゃない、フン、バ〜〜カ”と心でつぶやいた。前の方を見ていると応募したと言っていた明菜のうつむいた姿があった。亜紀は、明菜にばれないようにうつむいていることにした。

しばらく待っていると、受付をやっていたイケメンのお兄ちゃんが、勢いよくドアを開け、笑顔で部屋に入ってきた。「皆さん、お待たせしました。今回は、35名の方が、エントリーされました。一次審査の結果は、一週間後に郵送で通知いたします。審査会場へは、案内スタッフが順次呼びしますので、指示に従って、審査室に入ってください」しばらくするとかわいい案内スタッフがやってきた。「今から、順に案内いたします。エントリーナンバー1、サクラダジュンコさん」

亜紀は、不安になってきた。どうか、拓実が、無事歌えますようにと心で祈った。次から次に呼び出しがなされていった。審査は、かなり早いペースで終わっているようだった。「エントリーナンバー18 ミナミサオリさん」次は拓実の番と思った亜紀は、脚が震えだした。「エントリーナンバー19 セキタクミさん」ついに来たと緊張してしまった亜紀は、拓実を抱きかかえたままジャンプして返事した。「はい！」顔を真っ赤にした亜紀は、拓実をそっと床に下ろし、拓実の手を引いて、ドアに向かった。幸運ことに、エントリーナンバー7の明菜は、すでに終えて、顔を合わさずに済んだ。亜紀の右手は、緊張のあまり汗でびしょりだった。だが、拓実は、全く動じていなかった。

審査室に入ると、長テーブルに三人の審査員が腰かけていた。部屋の中央には、ステージがセットされていた。向かって左手に白髪のおじさん、真ん中に眼鏡のおばちゃん、右手に受付をしていたイケメンのお兄ちゃんが、マジな顔つきで二人に目を据えていた。二人がステージに立つと、亜紀は、案内スタッフからマイクを手渡された。だが、すぐに、拓実を手渡した。笑顔を作り拓実に視線を向けた眼鏡のおばちゃんが、優しく声をかけた。「ももいろといき、ね。アカペラで、ハイどうぞ」亜紀は、アカペラの意味が拓実はわからないと思い、拓実にとにかく歌うように促した。「タクミ、カラオケなしで歌うの。歌える？」拓実は、頷き、歌い始めた。「さかせて さかせて ももいろといき あなたに だかれて こぼれるはなになる・・・」

エントリーのミスは、3歳を13歳と勘違いしたスタッフにある事が分かり、審査員たちは、とにかく聞いてあげることになっていた。しばらくすると、じっと聞き入っていた審査員の顔が紅潮してきた。3歳にしては、信じられない透き通った歌声と歌唱力に感嘆してしまった。本来ならば、1週間後に郵送で結果を知らせることになっていたが、三人の審査員の話し合いの結果、この場で褒めてあげようということになり、感想と審査結果を伝えることになった。

白髪のおじさんが話し始めた。「信じられない。3歳で、こんな大人の歌を歌えるとは。声と言い、歌唱力と言い、素晴らしい」中央の眼鏡のおばちゃんも笑顔で話し始めた。「まったく、信じられない、こんなに歌唱力のある子供は、初めて。とってもかわいいし、きっと、このまま頑張れば、アイドルになれるわ。小学生になったら、もう一度チャレンジしてね。すごくよかったわよ」



審査員たちは、拓実を女子と完全に勘違いしているようだったが、亜紀は、素知らぬ顔で、満面の笑みを作りお辞儀をした。拓実は、笑顔で話す審査員たちを見てニコニコしていた。亜紀は、拓実の耳元で褒められたことを伝えた。二人は、審査室を出るとヒフミンが待っている広場に出た。ヒフミンは、ベンチに腰掛け将棋の本とにらめっこしていた。スパイダーは、ヒフミンの足元で寝ころんでいた。

「ヒフミン、お待たせ。タクミ、かわいくて、きれいな声してるって、審査員に、すっごく褒められた。きっと、アイドルになれるって」ヒフミンは、ほっとして、拓実に話しかけた。「さすが、タクミ。アイドルになれば、サイン頼むな」拓実は、アイドルの意味がよくわかっていなかったみたいだったが、笑顔でうなずいた。スパイダーも拓実の笑顔を見て、しっぽをフリフリ、ワンワンと祝福した。

## 兵役義務

歩いて伊都文化会館までやってきた亜紀たちは、歩いて帰る元気はなかった。それで、タクシーに乗って帰ろうと思ったのだが、亜紀もヒフミンもタクシーに乗るお金を持ち合わせていなかった。やむなく、亜紀は、明菜の応援に伊都文化会館まで歩いて来たと嘘を言ってアンナに迎えに来てもらった。夕食時、亜紀たちが歩いて伊都文化会館まで行ったことをあきれた顔でアンナはさやかに話した。「さやか、亜紀ったら、伊都文化会館まで歩いて行ったんだってよ。しかも、ヒフミンに拓実をおんぶさせてよ。いったい、何を考えてるのかしらね。明菜ちゃんの応援に行くっていえば、送ってあげたのに」

さやかも目を丸くして亜紀を見つめた。「アキちゃん、タクミちゃんは、まだ小さな子供なんだから、遠出するときは、アンナに頼みなさい。それに、たとえ仲のいい友達だからと言って、友達におんぶさせたりしちゃだめよ。いい」亜紀は、叱られてもうなずくだけで、拓実がオーディションを受けたことは黙っていた。アンナは、うつむいてまったく反論しない亜紀がかわいそうになったのか、話を替えることにした。

「まあ、無事に帰ってきたことだし、さあ、いただきます。アキの大好きな佐賀牛のしゃぶしゃぶよ。あんなところまで歩いたんだから、おなかペコペコでしょ。たくさん食べなさい。タクミは、なんだか、ご機嫌じゃない。いいことでも、あったのかしら？タクミも、たくさん食べて、ヒフミンみたいにたくましい男子にならなくっちゃね。そういえば、ヒフミン、奨励会、合格したのかしら？」

亜紀が目を輝かせて、返事した。「ヒフミン、合格したみたい。師匠に神武以来の天才って、言われたんだって。でも、師匠のところの下宿するのは、中学になってからだって」アンナは、笑顔で話を続けた。「それは、よかったわ。もうすぐじゃない。半年後には、大阪に行ってしまうのか。ちょっと寂しい気もするわね。おバカさんだけど、とっても優しい子だから、師匠にも好かれるんじゃない。将来、名人になるといいわね」

亜紀もヒフミンがいなくなると寂しくなるような気がした。今までヒフミンを応援していたが、いなくなってしまうと思うと元気よく応援する気になれなかった。いつも頓珍漢（とんちんかん）なことを言っていたが、さやかもヒフミンのやさしさを実感していた。「今どき珍しい、おバカで優しい少年じゃない。人は見かけじゃわからないものね。おそらく、みんな、ヒフミンのすごさがわからないのよ。ヒフミンは、奇跡を起こすような気がする。きっと、歴史に残る名人になるわ」

亜紀はいつも心でおバカおバカと言っていたが、なんとなくそれは違っているような気がした。逆に自分たちこそ常識にとらわれたおバカじゃないかと思えた。伊都文化会館までおんぶするなんて、大人はおバカと思うかもしれないけれど、ヒフミンのおんぶは大人が忘れてしまった本当の優しさじゃないかと思った。頭が悪い人をバカにする大人びた秀樹だったら、絶対におんぶなんかしないと。でも、名人になってピースと結婚する、と言い張るところなどは、やっぱり、かわいいおバカかも、と心の奥で笑ってしまった。

拓実は、みんなの話にはまったく無関心のように黙々とお肉を食べていた。「タクミも、もう少し男の子らしくなったらいいんだけど。今のままじゃ、兵隊には行けそうもないわね。でも、兵役義務は守らないと、刑務所に入れられちゃうし。困ったものだわ。どうにか、兵役を逃れる方法はないのかしら」女子に見える拓実をじっと見つめて、亜紀も心配になった。「絶対に、行かないとだめなの？タクミは、兵隊なんて絶対無理」

さやかも亜紀と同感だった。拓実はまったく男子に見えなかった。おそらく、成人しても女子に見えるんじゃないかと思えた。「そうね。タクミちゃんは、男子に見えないもの。兵隊に行ったら、みんなにいじめられるわ。かわいそう。兵隊に行かなくてもいい何か裏技はないかしら。そう、性転換して、女子になるってのは、どう？アイドルユニットに入って、兵隊の慰問に行く役をすればいいのよ」

亜紀もできることなら性転換手術を受けさせても兵隊にやりたくなかった。でも、もし特高警察に見つかったら、しょっ引かれて、拷問されて、裁判にかけられるようで怖くなった。アナは、いつものごとくいい加減なことを言い始めたと思い、さやかを睨み付けて叱るように強い口調で話した。「さやか、タクミは立派な男の子よ。何がアイドルよ。これから、バシバシ鍛えれば、たくましい男になるわよ。でも、兵隊にはやりたくないわよね。戦争に行けば、生きて帰ってこられるとは限らないんだから。だからと言って、兵隊を拒否したら、ブタ箱行だし」

亜紀は、軍服を着た拓実が鉄砲を担いでいる姿を想像しただけで背筋がぞっとした。今後、中東での戦争が大きくなって、北朝鮮と韓国が参戦すれば、日本までも戦場になるように思えた。もし、戦場になって、原発が破壊されたら、日本は放射能に覆われて、誰も住めなくなるように思えた。そうなれば、どこに逃げればいいのかと不安になった。さやかおねえちゃんが言っていたように、九州は独立国家になるべきだと思えた。「さやかおねえちゃん、やっぱ、絶対に戦争をしない九州帝国を作るべきよ。アキ、さやかと一緒に独立運動をやる」

アンナは、さやかの妄想話に乗ってしまった亜紀にあきれてしまった。アンナは、戦争のない世界なんて、妄想に過ぎないと何度もさやかに言った。だが、ついに、亜紀までも妄想に取りつかれてしまったと、天を仰いでしまった。「アキ、バカなこと言うんじゃないの。国家は、戦争しなくてはならないの。戦争に勝って初めて、平和がつかめるのよ。戦わなかったら、殺されるだけなのよ。もっと、現実を見つめなさい。さやか、妄想話をアキに言うんじゃないわよ。そんなこと、特高警察に知られたら、ブタ箱行よ。まったく、困ったものだわ」

さやかたちの地下組織は、KGBをバックにクーデターの準備を進めていた。このまま戦争が激化すれば、破壊効果の高い福井の大飯原発と静岡の高浜原発は破壊されてしまう。そうなれば、本州には、住めなくなってしまうと考えた。放射能から逃れるには、九州を独立国家にして、本州を切り捨てるべきだと考えていた。このことは、超極秘事項であった。亜紀の口から、地下組織のことがばれては一大事と話を替えることにした。

3人は話にも夢中になっていたが、いつの間にか食事を終えた拓実はピースたちと遊んでいた。さやかは食糧難について話し始めた。「早く、戦争は終わってほしいものだわ。このままいけば、食べるものがなくなってしまうわよ。鶏肉と牛肉の輸入量が一気に減ったみたいで、最近、カラスやハトがニワトリの代わりに売られているというじゃない。もうしばらくしたら、イヌやネコが牛肉の代わりに売られるんじゃないかしら。スパイダーを売ってくれって、肉屋がやってくるかもね」

あまりにも残酷な話を耳にした亜紀は、立ち上がってさやかに抗議した。「さやか、何言うのよ。スパイダーは、売らないから。ピースもいやよ。絶対ダメ。戦争なんかするからいけないのよ。人間って、どうしてバカなことするの。どうして、仲良く暮らせないの」アンナは、血相を変えて大声を出した亜紀をなだめた。「アキ、大丈夫よ。食糧難になっても、スパイダーとピースを食べるようなことはしないから。そのために、畑にイモや野菜を植えているんだから。人間は、肉を食べなくっても、イモさえあれば、どうにかなるから。さやかだったら、ちょっと言い過ぎじゃない」

さやかは、亜紀がこんなに血相を変えて怒るとは思っていなかった。「世界中で、ニワトリ、牛、豚が、原因不明の病気で死んでいるらしいのよ。ウイルス兵器が使われているんじゃないかと言う噂よ。これから、きっと食糧難になるわ。だから、なんでも食べられるように訓練しておいた方がいいかも。たとえば、ヘビとか、カエルとか、ネズミとか」亜紀は、ヘビと聞いて吐き気がしてきた。アンナも今食べた牛肉がカエルの肉のように思えてしまった。「さやか、やめてよ。せっかくの御馳走が台無しじゃない。食糧難になっても、ヘビなんか食べないわよ」

亜紀は、中学家庭科の授業についてのニュースを思い出した。全国の中学校での家庭科の授業でヘビとカエルの調理学習が義務付けられたと報道していた。やはり、今後の食糧難対策の授業だと思った。亜紀は、しかめっ面で話し始めた。「さよかの言う通りかも。イヌやネコまで食べることになったら、どうしよう。たえそう言ったとしても、アキは、ピースとスパイダーを必ず守ってやる」イヌやネコを食べると聞いたピースとスパイダーは、顔を引きつらせ一目散に二階にかけて行った。